

観心寺如意輪観音像の造像について

三橋 由吾 (早稲田大学)

観心寺如意輪観音像は平安時代初期密教彫刻を代表する作例であり、承和10年(843)頃に嵯峨皇后橘嘉智子の発願によって造像されたことが有力視されている。本像についてはこれまで優れた研究が蓄積されている一方で、いまだ明らかになっていない点も多く考察の余地がある。そこで本発表では三つの観点から本像についての考察を試みる。

まず、本像の造像がどのように進められたのかについて考察を加える。従来は河内国守が兼任する俗別当が本像並びに安置堂宇である観心寺講堂の造営を担当していたとする説が有力視されてきたが、当時の河内国守、清原遠賀の史料からうかがえる業績が判然としない点は些か不審である。そこで承和10年(843)11月という観心寺講堂造営が開始ないしは本格化されたと目される時期に河内和泉校田使長官として河内に派遣されていた安倍安仁に注目する。安倍安仁は実務に優れ、嘉智子の夫である嵯峨天皇の信任が厚かったことがわかっている人物であり、嵯峨皇后であった嘉智子からも高い評価を得ていたことが想定される。安仁が本像ならびに講堂造営を主導した可能性を指摘したい。

続いて、本像の造像目的、すなわち発願者橘嘉智子の「御願」について論じる。近年では病弱な仁明天皇の身体護持が「御願」であったとする見方が有力視されており、最近になって承和の変を契機として和合親睦が「御願」であったとする説も出されている。発表者も承和の変が重要な契機であったことには同意する。しかし、嵯峨・淳和朝では政情が安定していたものの、その前代は皇位継承をめぐる争いの時代であったことは無視できない。承和の変が起きたことは嘉智子に争いの時代の再来を危惧させるに十分なものであり、その願いは和合親睦よりも降伏に近く、動乱から仁明天皇を守る、ひいては仁明朝の安寧を願うものであった可能性について論じたい。

最後に、形状の点から本像の造像について考察する。現図胎蔵曼荼羅中の姿や如意輪観音関係経典に説く像容が宝冠に化仏をあらわすのに対し、本像の宝冠には化仏があらわされていないことに着目する。不空訳『観自在菩薩如意輪瑜伽』や金剛智訳『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』には化仏が説法相をなすことまで規定されており、本像に化仏があらわされていないことは明確な意図があつたことだと考えられる。化仏をあらわさない如意輪観音の図像としては七星如意輪曼荼羅中の如意輪観音像があげられ、七星如意輪曼荼羅の典拠となる不空訳『七星如意輪秘密要経』は七星如意輪法によって敵国の大軍が退散したことを説く。これは仁明天皇を政治的動乱から守るといふ嘉智子の「御願」に通じ、図像の面からも功德の面からも本像の典拠としてふさわしいと考えられる。七星如意輪曼荼羅の請来は承和14年(847)帰朝の恵運まで下ると目されるが、本像の造像典拠となる可能性について検討したい。